



Title	フローベール作品の生成と構造
Author(s)	金崎, 春幸
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/53767
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	かな さき はる ゆき
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 25764 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	フローベール作品の生成と構造
論文審査委員 (主査)	教授 和田 章男
(副査)	教授 森岡 裕一 京都市立芸術大学教授 柏木加代子
	准教授 山上 浩嗣

論文内容の要旨

本論文は、フローベールの小説作品を、テクストの生成過程と作品構造の両面から分析し、その特徴を明らかにすることを目的としている。全体は二つの部に分かれ、第 I 部はテクストの表層からのアプローチであり、生前に刊行された作品を中心にその構造や形式を明らかにする。第 II 部では、いわばテクストの深層に分け入り、作家が参照した原資料や草稿を調査しながら、フローベールの文学創造の根底にあるものを浮かび上がらせようとするものである。5 章から成る第 I 部、6 章から成る第 II 部、および結論から構成され、A4 判 273 頁、四百字詰原稿用紙に換算して約 820 枚となる。

第 I 部では、フローベールの小説を刊行された順に『ボヴァリー夫人』（1857）、『サラムボー』（1862）、『感情教育』（1869）、『聖アントワーヌの誘惑』（1874）、『三つの物語』（1877）を章ごとに論じている。同じモチーフの繰り返しや類似のモチーフとの関連を手掛かりとしつつ、隠された作品構造の解明を目指している。

『ボヴァリー夫人』を対象とする第 1 章では、鏡のモチーフに分析し、実像と虚像というテーマを導きだす。このテーマは論文全体に及ぶ射程を持ち、序論としての機能を併せ持つ。第 2 章で考察される歴史小説『サラムボー』の原資料はポリュビオスの『歴史』であるが、カルタゴの傭兵反乱の期間が歴史上と小説上で異なることに着目し、様々な時間指標の分析を通じて、小説独自の時間リズムを明らかにし、そこに宗教的・神話的時間の介入を見る。第 3 章では同時代を背景とする現代小説『感情教育』を扱い、1840 年代のパリという現実空間に基づきながらも、「箱」の開閉のイメージを喚起する物語空間が形作られていると論じる。第 4 章では『聖アントワーヌの誘惑』に関して、異なる時期に執筆された 3 つの稿の空間構造の変遷を中心に分析し、ブリューゲルの絵に触発された舞台空間が徐々に崩壊し、語り手の存在を持つ多様な小説空間への変化を明らかにしている。第 5 章で考察される『三つの物語』については、時代や背景が異なりながらも、「白馬」や「輝く目」などのモチーフ

の分析によって、ヨハネ黙示録のキリスト降臨のテーマのもとに作品全体がシンメトリックな構造を成していることが明らかにされる。

第 II 部では、宗教のテーマを中心にして、下書き草稿や作家が参照した原資料の調査・分析がなされている。第 1 章では主に『聖ジュリヤン伝』と『ボヴァリー夫人』におけるルーアン大聖堂にかかる場面を対象としながら、キリスト教的要素の中に異教的要素が混濁していく過程を分析する。このような諸宗教混濁（サンクレティズム）は、2 章～4 章の『聖アントワーヌの誘惑』の生成過程分析の中心テーマとなる。オフィス派が崇拝する蛇、アポロニウス、アドニスなどの異教的存在に、キリストのイメージが重なっていく過程が綿密に分析される。第 5 章では、『聖アントワーヌの誘惑』の最終稿から削除された「近代都市におけるイエス・キリストの死」という挿話の生成過程を分析しつつ、最終稿に現れる太陽崇拜とキリストとの融合をフローベールのサンクレティズム的傾向を表す一要素として位置付ける。第 6 章では「糞」と「堆肥」という宗教とは対照的なテーマを扱いながらも、あらゆるものを見み込みつつ創造へと転化させていくフローベールの文学創造の本質を論じ、創作過程に訪れる「天啓」に着目することによって、作家の執筆の仕方を「職人的エクリュール」というよりも「宗教家のエクリュール」とみなしうると結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文の第 I 部は、フローベールの完成作 5 篇の小説を対象として、繰り返し現れるモチーフ、テーマに着目しながら、特に時間的・空間的要素を綿密に分析し、各作品の隠れた構造を明らかにしている。時間・空間の様々な指標、人物・事物・風景の描写、人称代名詞の独自の使用法などテクスト上の細部への着眼は極めて独創的であり、その分析は綿密かつ説得的である。『サラムボー』の時間構造のリズムや規則性の中に見られる神話的意味、『感情教育』における作中人物と閉じた空間との関係性からの物語構築、『聖アントワーヌの誘惑』の空間構造の分析に基づく舞台空間から小説空間への移行過程、ヨハネの黙示録を背景とする『三つの物語』のシンメトリックな構造の分析など、どれも秀逸な論となっている。

第 II 部は主に宗教のテーマのもとに、草稿資料に基づくテクストの生成過程が考察されている。フランス国立図書館に所蔵されている『聖アントワーヌの誘惑』の草稿のうち本テーマに関連する箇所に関して、草稿の分類、執筆順の確定、年代設定などが正確に行われており、このような基礎的作業はフローベール草稿研究に大きく貢献するものである。また、草稿からの引用はすべてディプロマティック型転写（再現型の転写）によるもので、正確さについても信頼に値する。歴史的資料の読書ノートから始まり、加筆部分に作家独自のヴィジョンや虚構が加わっていく過程が綿密かつ適確に跡付けられ、キリスト教と異教を混濁させていくとする作家の意図が生成過程の分析によって明瞭となった意義は大きい。

第 I 部第 1 章『ボヴァリー夫人』論の「鏡」のモチーフ、第 II 部の「糞」と「堆肥」のモチーフはやや特殊に見えるが、前者は実像と虚像というテーマを導き出すことによって、論文全体に通じる導入部の役割を果たし、後者はフローベール美学の本質に関する結論部となっている。第 I 部の構造分析と第 II 部の生成研究は、方法論上の相違があり、論文全体の統

一性をやや損なっていることは否めないが、テクストの表層と深層という両面からのアプローチによってフローベール作品の特質を見事に浮き彫りにしていることは確かである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。